歌人岸上大作

姫路文学館学芸員　竹廣裕子

一枚の写真

一枚の写真がある。細い指を神経質に組みながら、卓上のカーネーションにどこかうつろで不安気な視線を送る青年。最もよく知られている歌人岸上大作の肖像である。撮影されたのは、昭和三十五年九月二日。当時、岸上大作は新鋭歌人として注目されており、その他の若手歌人たちとの座談会にのぞんだ際の一枚である。じつはこの写真、よく見ると、眼鏡のレンズが割れているのがわかる。

この年、日本は日米安全保障条約の改定にあたり大きく揺れていた。国会議事堂では連日のように大規模な抗議行動が繰り広げられていた。六月十五日の夜。国会構内に突入したデモ隊と警官隊の間に、激しい衝突がおこり、そのなかで東大生の樺美智子が命を落とした。この日、雨に濡れてスクラムを組んでいた学生たちの中に岸上大作もいた。振り下ろされる警棒から逃れようとして彼は後頭部に傷を負い、眼鏡のレンズは割れた。

血と雨にワイシャツ濡れている
無援ひとりへの愛うつくしく
する

近現代の名歌としてもたびたび採り上げられてきた岸上大作の代表歌は、この強烈な体験から生まれたのである。

こうして壊れた眼鏡を岸上はその後も直さずにかけていたらしい。「六〇年安保」を象徴するあの雨の夜、あの場所にいたことを証明する、それはこの若者にとって勲章のようなものであったのかもしれない。

詩人や作家の肖像写真には、たとえば中原中也のように、その人物の資質がそのまま映し出されたかのような深い印象を与えるものがあるが、岸上大作の写真もまた、この青年の人物像を切ないまでに訴えかけてやまない。そしてさらに、これが彼の生前最後の姿となった。この写真が撮られてから約三ヶ月後、岸上大作は闘争の敗北と失恋を理由に、二十一歳の若さで自らの命を絶ったのである。

その死から五十五年。昨年（平成二十七年）、辻川山の上に岸上大作を顕彰する「望郷の丘」が完成した。

岸上大作

この展望台には、岸上の短歌が数多く紹介されている。彼が高校一年生から大学三年生までの六年間に詠んだ歌は五六九首。これが生涯に残した歌の全てである。

これらの歌が、どのような背景のもとに生まれたか、その二十一年の生涯の物語をたどってみよう。

父の戦死

岸上大作は、昭和十四年十月二十一日、福崎町西田原に父繁一・母まさゑの長男として生まれた。昭和十七年に出征した父は、昭和二十一年内地に戻ってきたものの横須賀で発病し、そのまま帰らぬ人となった。大作六歳の時のことである。

五月雨の中、泣きながら父の位牌を抱いていた記憶は、後年岸上にとって重要な創作のテーマとなった。

白き骨五つ六つを父と
言われわれは小さき手を
あわせたり

白き位牌持てと言われて
泣きわめきし父葬る日の
吾は一年生

また、父の記憶をほとんど持たない岸上にとって、父に愛されていたことをたしかに感じることのできるものが、戦地から届いていた幾枚かのはがきであった。

父ちゃんはお国のために元気よく戦っているよと書きましし父
五つのわれ文字覚えしをほめて
あり戦地の父の最後のたより

左から大作、母まさゑ、妹佳世

いだとさとり、いつしか社会の矛盾について目を向けるようになった。

田原中学校に入学すると、教師の影響で政治に興味を持つようになった。昭和二十八年十一月二十五日付の毎日新聞朝刊には、「戦犯送還を機にソ連と講和を」と題して「兵庫県・中学二年生　岸上大作」という署名入りの投書が掲載された。

その反米親ソ的な内容は校内でも問題となったという。また、生徒会活動にも積極的に参加するようになり、三年生の時、自ら立候補して書記長となった。当時の岸上は、生徒会報に他の生徒の生徒会への無理解、無関心を糾弾する主張を独断で掲載するなどして、生徒側からも教師側からも批判を受けることがあったという。その過剰なまでの熱意と使命感は、どこか周囲から浮いてしまうようなところがあったようだ。それでも卒業の際には、生徒会活動に貢献した功により特別賞を受けている。

母まさゑは、懸命に働き女手ひとつで大作と妹佳世を育てた。その姿を見て成長した少年は、幼い頃から、家の貧しさは、父の戦死のせ

短歌への夢

福崎高校に入学すると、文芸部に入り、友人たちと競い合って小説や短歌などの創作を始めた。

しかし、中学時代の生徒会活動への傾倒と同様に、ここでもやはり、友人たちと岸上が決定的に違っていたことがある。それは、文学に賭ける思いの強さ、切実さである。

彼は小説を書き始めたばかりでいきなり人気作家の丹羽文雄に作品を送りつけ、じりじりとして返事を待った。しかし四ヶ月後、丹羽からの返事（作文に過ぎないといった評価だったらしい。）が届いたときには、岸上の関心はすでにすっかり短歌に移っていた。

七月十日の日記に、彼は次のように書いている。

自分の歌は、未熟だ。だがぼくの進む道は歌の道だ。本当に歌が好きならきっといつかは立派な歌が作れる。

十六歳にして自らの道をみつけた岸上は「高校時代」「高校コース」「若人」などの雑誌に投稿をはじめ、入選の常連になっていった。

わが歌の活字となりし嬉しさよ
二度三度と声上げて詠まん
想うこと半分も言えぬ吾が性を
悲しと思い歌に託せる
歌一つ作りしことがかくも嬉し
今宵すがしくねむらんとする

地元の歌人木村真康の主宰する短歌誌「文学圏」に唯一の高校生として加わったり、早稲田大学教授の歌人・窪田章一郎が主宰する短歌結社「まひる野」に入会するなど、その内向的な性格とは裏腹な行動力を見せ、短歌という文芸に自らの将来を夢見るようにさえなった。

当時の彼が繰り返し詠んだのは、幼い頃から見つめつづけてきた働く母の姿であった。

メキメキと身体が鳴ると夜ごと
言う十時間働き縄なう母
残業の手当に母がもらい来し
十円のパンにつけるわらくず
ひっそりと暗きほかげで夜なべ
する母の日も母は常のごとくに

そんな高校時代に岸上大作が残した代表歌の一つがある。かつて高等学校の現代国語の教科書に採用されていた一首である。

かがまりてこんろに青き火を
おこす母と二人の夢作るため

この歌は、新しい年を迎える準備で、おせち料理の煮しめなどを作るために、真新しい炭を買ってこんろに火をつけるときのささやかなよろこびを詠ったものだという。

余談だが、この歌、じつは福崎高等学校にある歌碑では「赤き火」となっている。岸上は「青き火」として「まひる野」に投稿したのだが、師の窪田章一郎が「赤き火」に添削したのだという。したがって教科書にも「赤」のほうで採用されているのだ。

また、この頃の岸上は、寺山修司ら若き歌人たちの活躍に触発され、高校生雑誌の入選常連になっていた同世代の仲間を集めて同人誌の創刊を計画したこともあった。この時、連絡をとった一人が、龍野高校出身で当時國學院大学に在籍していた高瀬隆和だった。高瀬の回想によると、はがきで連絡をしてきた岸上に、じっさい会ってみると、はがきの文面の雄弁さとは打って変わり、うつむいてほとんど話そうとしない様子に驚いたという。それでも、この時に始まった高瀬との友情は、岸上にとってかけがえのないものとなった。なぜならこの高瀬こそ、岸上の没後、その遺作集『意志表示』を世に出し、長きにわたって岸上の遺した資料を守り、亡友の顕彰にその半生を捧げることになる人物だからである。

福崎高等学校卒業の日

大学進学
―大都会の孤独

高校卒業をひかえ、経済的な理由から、一度は就職を考えたこともあったが、東京で文学を学ぶという夢をあきらめきれず、奨学金を受け國學院大学へと進学した。さっそく「短歌研究会」にも加わった。

しかし、部活動をはなれると、友人は全くできず、大学のクラスでは常に孤立していた。ひとり街を歩き回り、古本屋をめぐり、映画を観て、アルバイトでわずかな金銭を得る日々。大都会のなかの孤独を彼は味わいつくした。遠く離れた故郷の母から届く仕送りには、身体の弱い息子を気遣う手紙がいつも添えられていた。母との手紙のやりとりを詠った歌は数多い。

皺のばし送られし紙幣夜となれば
マシン油しみし母の手匂う
幾枚の紙幣のための疲れにて
母に告げんにあまりに小さき
口つけて水道の水飲みおりぬ母
への手紙長かりし夜は

岸上の没後、その遺品の中からたくさんの現金書留の封筒が見つかった。母からの仕送りの入っていた封筒である。一人息子が卒業して故郷で教師になってくれることだけを楽しみにしていた母。その思いを知りながら、親不孝を続けた岸上であったが、さすがにその封筒は捨てることができなかったのだ。

この母からの手紙と、封筒の束は、姫路文学館で、岸上大作展を開催するたびに、最も多くの女性の涙をさそう資料となっている。

ひとりよがりの恋

岸上はいつも自分をあたたかく包み込んでくれるような恋人の登場を待ち望んでいた。それは、中学時代からずっと彼の中に根ざす強い願望であったといえる。しかし、彼の片思いはいつも痛ましいほどにひとりよがりなものであった。

美しき誤算のひとつわれのみが
昂ぶりて逢い重ねしことも

俳万智も『あなたと詠む恋の歌百首』という本で採り上げている、岸上のかなしい恋歌である。好きな人と何度も会うなかで、自分だけは特別な逢瀬のように舞い上がっていたが、相手には少しもそんな気持ちが無かったことを「美しき誤算」と詠んだ。このように岸上は相手に思いさえ伝えられないまま勝手に自滅するような失恋を重ねたのである。

二十歳の夢

二十歳を迎えようとする岸上には、ひとつの計画があった。十代で作った歌をまとめた一冊の歌集を世に問うことである。岸上には、十代のうちに何かを成し遂げたいという強い野望のようなものがあった。その計画を裏付ける一枚のメモが残されている。

歌集名は「生まれ出ようとして」。出版日は、昭和三十四年十月二十一日、つまり岸上の二十歳の誕生日である。序文、解説の執筆者、装丁担当者をはじめとして、出版資金の捻出方法までが事細かに記されている。ちなみに資金はすべて友人、知人、恩師などからのカンパをもくろんでいたらしい。当時、この計画を聞かされた友人らは、真に受けなかったようだが、このメモを見ると岸上がいかに真剣に歌集出版を計画していたかがわかる。しかし、むろん出版はできなかった。その夢の実現を信じていたのも、それがかなわなかったことを悔しく思ったのも、おそらく彼一人だけであった。

最後の一年―新鋭歌人として

こうして、岸上大作にとって最後の一年となる昭和三十五年が始まった。岸上は、不思議な年賀状を友人たちに送った。

死なうと思ってゐた。ことしの正月、よそから着物を一反もらつた。お年玉としてである。着物の布地は麻であつた。鼠色のこまかい縞目が織こめられていた。これは夏に着る着物であらう。夏までゐようと思った。

太宰の〈晩年〉から１９６０年１月１日にかきぬく。今年の最初におくることばする。

〈岸上大作〉

岸上は、ふだんからよく「死」を口にしたという。だから友人たちも、いつもの岸上流の冗談で、まさかこの年の終わりに本当に彼がいなくなろうとは想像もしていなかったであろう。

そして四月。彼の前に短歌研究会の新入部員として、理想に描いていたような聡明で美しい少女があらわれた。そしてまた恋が始まった。

岸上大作は、前掲の「血と雨に…」などの歌によって、学生運動の熱心な闘士のように思われることもあるが、じつは彼がデモに参加し始めたのは、この年の五月に入ってからのこと。彼の代表歌として知られる

意志表示せまり声なきこえを背に
ただ掌の中にマッチ擦るのみ

この一首が生まれたのは四月二十七日未明だった。四月二十六日、国会において学生たちの激しい抗議行動があり、夜のニュースでしきりに報じられたらしい。岸上は、ラジオでその報道を聞き、行動していない自らへの焦燥感のなかで「意志表示」一首を詠んだのである。

呼びかけにかかわりあらぬビラ
なべて汚れていたる私立大学
流されし血を負目としいちにちの
記事と語るな彼らの世界
幅ひろく見せて連行さるる背が
われの解答もとめてやまぬ

つまり、岸上は高揚感とためらいの中で、安保闘争の熱気にのみこまれていった当時の多くの学生たちの一人にすぎなかったのである。

そして、彼はデモに加わるようになった。思いを寄せる少女も先輩である岸上とともに行動していた。彼のなかで、安保闘争への参加と恋愛感情の高まりは、まったく軌を一にするものであった。

そんな時、「國學院短歌」に発表したエッセイが、角川書店「短歌」編集者の眼にとまり、短歌作品の依頼が舞い込んだ。その依頼に応じて作ったのが、「血と雨に…」の歌をふくむ「黙禱　6月15日　国会南通用門」七首であった。

ヘルメットついにとらざりし列の
まえ屈辱ならぬ黙禱の位置
むしろ弱く繃帯さらす地下街に
わが狭量もさらされていん

六月十五日の出来事を、岸上は自らの二つ目の戦争体験だとしていた。つまり彼らの世代にとって、安保闘争は、多くの肉親を失った第二次世界大戦につづく、もう一つの戦争体験なのだという意味づけである。これらの歌は、編集者の期待をじゅうぶんに満たすもので、「短歌」八月号に掲載された。

さらに高校時代からの念願であった「短歌研究」新人賞に「意志表示」五十首を応募したところ、「推薦作

品」に選ばれた。

二十一歳の死

こうして岸上大作は、安保闘争を鮮烈に短歌に詠みこんだ学生歌人として一躍注目されることとなった。若き歌人として歌壇に颯爽と登場すること、それは短歌を始めたときから、夢に描きつづけてきた一つの成功のビジョンだった。ここから亡くなるまでの五ヶ月ほどの間は、毎月のように総合短歌誌に作品や評論などを発表した。

この年の夏休み、岸上は福崎に最後の帰省をしているが、その間もまるで理論武装を急ぐかのように、多くの社会科学系の本を読むことを自らに課していたようだ。一方で、この活躍が彼を疲弊させていった。

十一月、大学祭の一環として、詩人吉本隆明の講演会を企画した。当時、吉本はあの六月十五日の国会構内抗議集会で演説し逮捕されるなどして、若者たちの絶大な支持をあつめる詩人であった。ところが、岸上が作った「革命の詩人、吉本隆明きたる」というビラが大学当局の目にとまり、中止勧告をうけてしまう。彼はたった一人でこの問題の処理にあたり、結局は勧告に従うことになる。この事は、権力に屈するという屈辱的な敗北として位置づけられ、大きな傷となった。その頃の日記には「自らの弱さに嘔吐しながら弱さにおぼれている」と記している。

やがて嵐のような一年が終わりに近づき、彼が自らの全存在を賭けて行った二つの行動、つまり安保闘争と恋はどちらも虚しい終息を迎えようとしていた。岸上の一方的な思いから発せられた言動は、まだ十九歳の少女を傷つけ、恐れさえ抱かせてしまったのだった。

断絶を知りてしまいしわたくしにもはやしゅったつは告げられている

生きている不潔とむすぶたびに切れ

ついに何本の手はなくすとも

そして、彼はついに「生きている不潔」に堪えきれなくなり、その内部でいつしか輝かしいものとなっていった死を選ぶことになる。

岸上が命を絶ったのは、十二月五日未明のことだった。死の七時間前から直前まで書き連ねた絶筆「ぼくのためのノート」を読んだ吉本隆明は、「失恋だと書いたり、弱かったのだと書いたり、また故意に道化てみせたりしているが、もっと奥深いところから彼を誘って死におもむかせたのは、彼の「遺書」の裏側を流れている巨きな時代的契機であったような気がする。」と書いている。二百字詰原稿用紙五十四枚に及ぶこの絶筆は、彼が生前に残した最も長い「作品」となった。

五十年目の墓参

平成二十二年十二月五日。岸上没後五十年目の命日に、福崎町西田原にある彼の墓に参るひとりの女性の姿があった。彼女こそが、岸上が全存在を賭けて愛した女性、歌人沢口芙美その人であった。その日の午後、姫路文学館で開催した没後五十年記念の福島泰樹講演会に来てくださった沢口氏から、その墓参の話を聞いたとき、思わず胸が熱くなった。自らの死によって、とてつもなく重い荷を負わせた少女との再会に岸上の霊はどれほど慰められたことだろう。

岸上の墓は日のあたる小高い斜面に立っている。両側には父と母の墓碑が立つ。昨年五月、出来たばかりの「望郷の丘」から、あらためてその場所を望んだ。彼の死によって深く傷ついた多くの心も、半世紀の時がようやく癒してくれたのではないだろうか…そんな思いが湧く、明るくやさしい風景が眼前にひろがっていた。